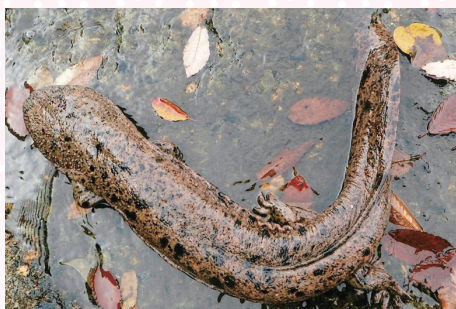


世界最大の両生類

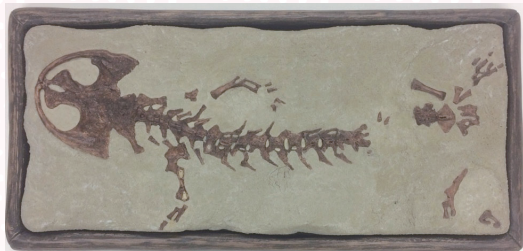
オオサンショウウオ ①

町内の河川では、しばしばオオサンショウウオを見かけることがあります。

このあたりでは山間部を中心に昔から生息していますので、一度はどこかで目にすることがあると思います。国内では岐阜県以西の本州・四国・九州の限られた範囲にしか生息していない希少な生物です。また、スイスで発見された三千万



オオサンショウウオ



スイスで見つかったオオサンショウウオの化石(模型)

年前のオオサンショウウオの化石と現在のオオサンショウウオの骨格がほとんど変わっていないことから、長い間その姿を変えていない「生きた化石」ともいわれる世界最大の両生類でもあります。

現在では世界中でも日本と中国と北アメリカにしか生息していません。これら三国のオオサンショウウオも同じオオサンショウウオ科ですが、生物学上の分類では属・種が違い、国内に生息するオオサンショウウオは、正確には「ニホンオオサンショウウオ」という固有種になります。

オオサンショウウオの生息については、未解明な部分も多いのですが、卵から孵化して数年はエラ呼吸で、成長するにしたがい肺呼

吸になります。また、成長すると一メートル以上になるものもありますが、通常河川で見かけることが多い成体は六〇～八〇cmくらいです。肌には無数の小さなイボがあり、色は褐色で不規則な黒い斑紋が入ることが特徴で、よく見ればわかる程度の小さな目がついています。食べ物は、川の中に棲む魚類やサワガニ、カエルなどが主で、共食いをすることもあります。とにかく目の前に動くものがあれば食いつく習性があり、普段はとてもゆっくりとした動きですが、獲物に食いつく時は非常に素早い動きを見せます。口は非常に大きく、一度噛みついたら雷が落ちても離さないと言われるほどの顎の力があります。

寿命は長く、中には一〇〇年以上生きるものもいるといわれますがよくわかっていません。これまで一番長く飼育した記録というのは、江戸時代後期に來日したドイツの医師・博物学者であるシーボルトがオランダに持ち帰って飼育した五一年という期間がありますが実際の寿命は不明です。いずれにしても生息する場所の環境が良ければ半世紀以上は生きることができるようです。

オオサンショウウオは「大山椒魚」とも書き、皮膚から出る粘液が山椒の匂いに似ていることからこの名が

付いたといわれますが、実際の粘液は生臭く、山椒のような匂いはしません。また、半分引き裂かれても再生するという言い伝えから「ハンザキ」「ハンザケ」とも呼ばれます。実際にそこまでの生命力があるのかどうかは定かではありませんが、足の指などは欠損しても時間をかけて再生するようです。

かつては貧血に効くとか、疲労回復・滋養強壯の素として食べられることもあったようですが、現在は文化財保護法の下で国の特別天然記念物として保護されているため、食べることはできませんし、許可なく捕獲したり飼育することも禁じられています。調査研究のために捕獲を行う場合でも国の許可が必要です。

参考資料：「はんだきセンター」パンフレット、「真庭遺産研究会」HP、「上齋原村史」民俗編

3月号の訂正

3月号のこのコーナーにおいて誤りがありました。謹んでお詫び申し上げます。

2段目13行目

誤：古川の政治家・実業家である河田

繁穂

正：吉原の政治家・実業家である河田

繁穂

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733